根室標津「ポー川歴史自然公園」の湿原とその概要

三浦二郎

釧根地方の湿原分布は両手の掌

二十万分の一の釧路、根室地方の地図があれば、その上に両手の掌の指を開いて置いてみてください。左手の掌を釧路湿原のど真中におくと、拇指は塘路湖、シラルトロ湖という、かつての釧路海の海跡湖であるいくつかの湖沼群とその周辺の湿原に、人差指は釧路川沿いにずっと北にのびた湿原、そして中指は雪裡川沿いの湿原に当たります。

右手の掌を風蓮湖におくと、拇指にあたるのがちょっと離れてはいますが霧多布湿原、人差指が風蓮川沿いの湿原、そして中指にあたるのが、ちょっと北に離れての野付半島と標津湿原ということになるでしょう。

私はこの広大な釧根地方の湿原は、残り少なくなった日本の、そして北海道でぜひ保存し、保護すべき貴重な湿原だと考えております。そして擬人的に記した掌と拇指、人差指、中指にあたる部分は、特に、どんなに開発が進められようとも、絶対に守り抜かねばならぬ湿原だと考えます。残念ながら、この両手の薬指と小指の部分は、すでに開発（農地その他）で無残に埋め立てられてしまっておりますが、両手の用としては、よしんばその二本ずつが切り落とされても働くわけです。

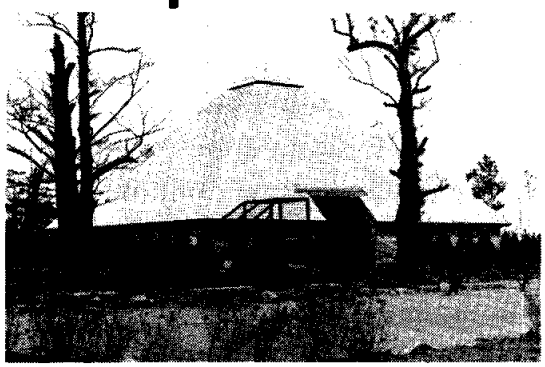
少し乱暴な云い方をしましたが、すでに開発された部分を元の湿原に戻すことは、二酸化炭素が大気に充満し、地球上の平均気温が二～三度上昇し、両極の氷が融けて海面が一〇mも高くなって、ほとんどの農地が水没する地球破滅の時代がくるまでは、人間の力だけでは不可能であろうと思われるからです。その部分は、もう一度地図の上に両手の掌を置いていただくと理解できると思います。

したがって、この残された両管内の湿原の保護については、お互いの地域セクトを排して、「道東広域湿原国立公園化構想」に向けて運動を結集して行かねばならないと考えている次第です。そのイニシアチブは、北海道自然保護協会にぜひとっていただきたいものと思っております。

たとえば、釧路湿原はラムサール条約に基く国際保護湿原として曲りなりにも保護が約束されておりますが、水鳥の生息地としては、釧路湿原と同等以上に重要視さるべき風蓮湖及び周辺の湿原は開発がらみの思惑のため指定が返上され、その保護については、これといった保障がない現状だからです。

標津湿原が注目された始まり

さて、その右手の中指を根室海峡沿いにすっと北にのばした位置に、野付半島湿原と標津湿原があるのです。



歴史民俗資料館
ポー川史跡自然公園のメイン施設

野付半島が科学的に調査されたのは一九六一～四年、佐々教授の指導のもとに北大探検部が総合調査を実施し、初めて文献として記録されたものです。その中で植生については若き日の伊藤浩司先生が、かなり精度の高い調査をされております。しかし、この時点での植生調査は森林群落についての記載が主で、湿原相については概略しかふれていなかったのですが、その後、別海町の委嘱による「野付崎植生調査」が伊藤先生と鮫島惇一郎先生によって実施され、その報告書には沼沢植生及びミズゴケ湿原または泥炭地植生の項に、半島の湿原について詳しくふれられています。

そしてその湿原で、日本で初めてアカアシシギの繁殖が発見されましたし、繁殖地が根室地方に拡散したタンチョウの生息と繁殖が確認されるようになって、野付半島湿原の価値が認められてきました。

野付半島についてはその後、WWFJの助成を受けた根室自然保護教育研究会（現、根室自然教育研究会）が、一九七七～八年度に総合調査を実施し、データの集積を図ったわけですが、標津湿原に科学のメスがふるわれたのは、少し遅れて始められました。

国道二四四号線が標津市街を抜け標津川鉄橋を渡って北上する段階で、左手に広びろと拡がる一帯の湿原については、早くから心ある者にその貴重性と保存について注目されていたのです。しかし、根室地方にはご存知のように大学等の調査研究施設がないことがネックになって、科学的調査がなされないままに放置されておりました。

その当時、この一帯は三本木湿原と称されておりました。そのうちに国道沿いの一帯が整地されて海産加工場の干場が造成されたり、ガソリンスタンドや自動車整備工場が建設されるようになったのです。

そういう成りゆきまかせの中で、標津町理科サークルの招きに応じた教育大学釧路分校田中瑞穂教授が一九七二年に現地入りをされ、その時の所見を「根室標津町周辺の植生知見」としてまとめられたのが、研究者によるここの湿原についての調査報告としては初めてでなかろうかと思います。

この時は、「川北のヒカリゴケ自生地」「三本木草原」「ポンノウシ海岸草原」と「川北ならびに三本木湿原」といった川北から野付半島、そして三本木湿原にわたる広範な町内各所を馳け足で視察したもので、精度としては必ずしも満足すべきものではありません。

しかし、三本木湿原では、ミズゴケブルト上の所生植物として、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、ガンコウラン、コツマトリソウ、コケモモ、ヒメシャクナゲ、ホロムイツツジ、エゾイソツツジ、サワラン、トキソウ、クロミノウグイスカグラ、モウセンゴケ、ミツバオウレン、エゾゴゼンタチバナ（霧多布湿原以東のみ）、ヤチヤナギ等（※田中教授のメモ的記載順のまま）を記録され、短時間の調査所見としては、やはり卓越したものであり、これは今もこの湿原植物研究のベースになっております。そして、地元の理科担当教師に向けて、〝ばくぜんと保存地とするよりも、とくに積極的に研究地として、理科教育を担当する方々が足を運んで、この湿原のさまざまな状況を知るべきだと考える〟と助言され、例えばブルトとシュレンケの配置実測図を記録するというような野外研究の方法も示唆されました。

このことは、その後の町内理科サークルの研究に生かされた実績は若干ありますが、大きなうねりを呼び起こすには至らなかったようです。

その後、一九七八年を第一回とした大自然教室〝北海道標津キャンプ〟が、毎年標津町薫別小中学校を会場として開催されるようになりました。

このキャンプは、日本自然観察路研究会（代表、東京農大第一高校・内海広重氏）が主催し、東京都内の私立高校生の希望者を募って約一週間、北海道の大自然を体験させようという企てです。

これには日本自然保護協会が後援し、日本ナチュラリスト協会の学生諸君もボランティアとして協力しています。薫別をベースキャンプにして、近辺の野付半島見学やラウス岳登山等をスケジュールに組み入れており、当然のように三本木湿原の付近を何回か通過するわけで、このキャンプの指導者として参加している教官や学生の目にも止まるようになり、この湿原の価値を認め、地元教育委員会との接触の中で、行政側にそれを伝えるという働きかけがあったようで、その調査レポートが置きみやげのような形で提出されました。

□……カリカリウス遺跡群の文化財指定……□

一方、先住人の遺跡分布は、根室管内では少数の熱心な研究者によって精力的に続け

られ、特に標津町内では一九七〇年頃までにはほぼ調査が完了しておりました。それによると町内には二六個所の埋蔵文化財のポイントが確認され登録されました。その多くは、根室海峡に面した海岸線の段丘上に分布しておりますが、これは釧路湿原をとり囲む段丘上の遺跡群の分布と共通したものがあります。その中で最大のものは、一つのチャシ跡を含む一、二四一の竪穴跡が確認されたカリカリウス竪穴群です。

農地開発等で内陸部の竪穴群の多くが、人知れず破壊されたと思われるのに、これほどの規模の竪穴群が温存されたというには、この一帯が十条製紙の社有林であったからなのです。社有林の原生植生は多分針広混交林であったろうと考えられますが、一次的に有用な針葉樹を伐採したあとは、落葉広葉樹林としての二次林を形成しております。この林の中の遺跡群が実測され、全容が確認されたのは一九七四～五年の調査によるもので、その巨大さには調査に当った文化庁、道教育庁の担当官も驚いたようです。

そこで、この巨大な遺跡群を何とか保存したいということで浮かび上がったのが、その後確認された古道（ふるどう）遺跡群等も含めた〝広域遺跡保存〟の構想です。これは当時進行されていた「根室中部新酪農村建設」という巨大開発に対応し、触発された構想であると云えます。

□……遺跡群保存と湿原保護をセットに……□

一九七六～七年にかけては、この遺跡保存構想に湿原保存をセットしようという考えが急速にふくらんできました。この湿原保存セット構想は、釧路湿原保護に大きな貢献をなされた田中瑞穂教授が参画されたことによるものです。先生のサゼッションもあって、文化庁による標津湿原の天然記念物指定の手続きが急速に進められました。残念ながら田中先生は病を得て急逝されたのですが、遺志を継いだ釧路市立郷土博物館学芸員新庄久志氏等によって、前記田中教授の所見をベースにした調査が進められ、天然記念物指定が実現したのです。

一方、遺跡群保存のための所有者十条製紙側との土地買上げ交渉にも目途がつき、一九八〇年秋に「ポー川史跡自然公園」としてオープンする運びとなったものです。公園は巨大なカリカリウス遺跡群と標津湿原の五百haを一括して保存し、一般に公開し、先人の遺跡群と、湿原―森林のすばらしい自然環境を学んでもらおうとする雄大な規模のものとして実現したものです。

開設当時の施設としてのメインはピラミッド型の歴史民族資料館で、出土遺物と開拓以来の民具と湿原植物のパネル展示が主なもので、入館料は有料です。

館外にはアイヌ文化研究者・萱野　茂氏の指導によって建築された縄文期、擦文期の復元住居が展示されました。また、一九八二年春には「開拓の村」として開拓当時の農家と小学校が復元され建築され当時の家具、農具、学校備品が収納展示されて、当時の生活を偲ばせるようになりました。

□……標津湿原の特色……□

標津湿原が保存されるまでの経緯について紙面を費やし過ぎたきらいはありますが、要するに遺跡群とセットされたこと、比較的交通の便がよいといった好条件に恵まれたことと、それに行政の保存保護の熱意と地域住民の理解を得られたこと等が相乗して、現在は町内はもちろん、道内外からの見学者が訪れ、観察、視察学習に有効に機能しております。

さて、この湿原の名称を「三本木湿原」から、いつのまにか「標津湿原」にかえて記述しましたが、これは天然記念物指定段階で包括的な名称としての標津湿原と改められたからで、現在は〝三本木〟という名称は死語化しております。しかし、ここの湿原と続いている観がある標津川下流氾濫原湿原を含めて標津湿原と称するのは若干の疑義があります。

さて、この標津湿原の特色とする所について、補足的に若干紹介しておきます。

歴史民俗資料館や開拓の村のある国道沿いの一帯は海岸砂丘です。カリカリウス竪穴群のある丘陵までの湿原には木道が施設され、湿原観察路になっており、その終点近くにポー川が緩やかに流れていて、木橋が架けられております。

この湿原の成因は、釧路湿原とやや同様に考えてよいと思います。つまり、千島火山帯の脊稜山脈から運搬された砂礫が推積して各河川流域に段丘を形成したあと、七千五百～四千五百万年前の縄文海進によって段丘の下部が海になったものが、その後の海退

と、千島半島部から供給されて新しい海岸線に形成された砂丘との中間の凹部が、湿原として発達したものであろうと考えられます。そしてポー川の水源が近くの段丘であるため、水量がさほど多くないので氾濫原となることもなく、安定した状態で湿原が形成されたものであろうと思われます。

このチャミズゴケのブルトは直径一～三mに発達し、その上をイボミズゴケ等が覆い、あるものはスギゴケも発生し、あたかも緑のクッションのようになっております。その頂部には、前記故田中教授記載の植物が発生しているわけです。

所生植物の中で注目される種はエゾゴゼンタチバナで、これはツンドラ帯が南下した時代（ウルム氷期）の遺存種とされ、現在は霧多布湿原以東にしか見られない植物です。そしてその遺存状態、つまり現在の分布は温量指数五〇度以下の線と一致しております。標津湿原は、ミズゴケ堆の発達とエゾゴゼンタチバナによって代表されているといっても過言でないと思います。

その湿原は、ポー川に近づいた地点に、かつて農地化を試みて掘削された排水溝の線で乾燥化が進んでおり、ノリウツギ、ダケカンバの侵入が始まっていますが、これも湿原の植生遷移の観察学習にはあってよいものでないかと考えております。

そして、ポー川に架けられた素朴さを強調した、しゃれた木橋を渡るとホザキシモツケのブッシュに囲まれたちょっとした広場があり、そこには展望台と、テーブルセット数組がしつらえられていて、一服休みができるようになっております。これらは全部自然木で作られており、また一服休みといっても、喫煙禁止（湿原入口から全部禁煙ゾーンになっている）ですし、ゴミ籠の設置はありませんので、水筒の水で喉をうるおし、おやつを食べる程度で、自分の出したゴミはすべて持ち帰らせるようなしかけになっております。

一服休みのあと、急坂の木製階段を登って段丘上のカリカリウス遺跡群を見学できるようになっており、ここには将来、先住民の住居が復元される予定になっています。遺跡群の段丘の縁のコースを北に少し歩いて小さな沢を越すと、大きなチャシ跡がありますし、それをひとめぐりすれば、さっきの広場にもどれるコースがつけられています。

つまり、ここのポー川歴史自然公園は、メイン施設である歴史民俗資料館を見学したあと、その一帯の砂丘から高層湿原の中を木橋の上から観賞し、ポー川を渡って段丘上の遺跡を見学するコースが設定されていて、ひとめぐりのコースの中に多様な自然環境がセットされており、自然学習や郷土学習に極めて有効に利用できるわけです。

ただ、冬季間は除雪等の関係もあって閉鎖されておりますが、五月から十月までの開設期間には地元の小・中学生の団体見学をはじめ親子連れの利用が多く、管外・道外からの見学者も加わって大へんにぎわっております。

□……□
「ポー川歴史と自然の丘」の刊行

これら見学者のための観察学習の手引書として、日本自然保護協会工藤父母道氏の指導によってガイドブック「ポー川歴史と自然の丘」が編集され、発行されました。

日本自然保護協会発行の国立公園ガイドシリーズと同じスタイルですが、平易な文章で、小学校高学年以上で使えるものという方針で編集にあたりました。地形地質、気象、湿原、植物、けもの、野鳥、魚、昆虫、遺跡等の各分野は根室自然教育研究会々員が分担し、開設の次の年の春のオープンに間に合わせるといった芸当めいた発行ぶりでした。

発行人は標津町教育委員会となっておりますが、お役所臭の全くない、自然保護を基調としての筋の通ったガイドブックです。そろそろ北海道自然保護協会の手で道立公園ガイドブック・シリーズが企画されてよい時期でないかとも思います。

□……□
むすび

湿原は産業的には無用のものであり、開発を阻害するものであるという考え方は、まだ根強く残っていると思われます。湿原の生態系（人間を含めて）の重要性については他の方が当然お書きになられると思いますので省略しますが、その保護策については開発側の圧力の方が強いのが残念ながら日本の現状だと思われる中で、遺跡群とのセットで保護され、それが自然教育に活用された数少ない事例として紹介させていただいた次第です。

（根室自然教育研究会）